◎次の文章は「天徳内裏歌合」の様子を記した藤原清輔の『袋草紙』の一節および関連する資料である。これを読んで、あとの設問に答えなさい。

*廿番

左　　*忠　見

*恋ひすてふわが名はまだきたちにけり人しれずこそ思ひそめしか

右　　*兼　盛

*しのぶれど色に出にけりわが恋はものや思ふと人のとふまで

「*小臣奏して云はく、「左右の歌、共にもつて優なり。勝劣を定め申すこと能はず」と。勅して云はく、「おのおの尤(もつと)も歎美すべし。*ただしなほ定め申すべし」てへれば、小臣*大納言源朝臣西宮殿なり。に譲るも、*敬屈して答へず。この間互い互に詠み揚ぐること、おのおの我方の勝を請ふに似たり。*小臣頻りに天気を候(うかが)ふに、いまだ勅判を給はず。*密かに右方を詠ぜしむるか。源大納言密かに語りて云はく、「*天気もしくは右に在るか」*てへれば、これに因りて遂に右をもつて勝となす。*思ふ所有りて、暫くは*持(じ)に疑ふなり。ただし、右歌甚だ好し」と云々。

故老云はく、「この日兼盛衣冠を正して陣に参り、終日*祗候す。この歌勝つの由を聞くや、*拝舞して退出し、*自余の歌の勝負に至りては執せず」と云々。

注

＊廿番――二十番。　＊忠見――壬生忠見。壬生忠岑の息子。　＊兼盛――平兼盛。　＊小臣――判者の左大臣藤原実頼。

＊恋すてふ～――恋をしているという私の噂は早くも立ってしまった。人に知られぬよう思いそめた恋だったのに。拾遺集・恋一・六二一、拾遺抄・恋上・二二八とともに「天暦御時歌合」として入る。

＊しのぶれど――じっと秘めていた私の恋なのに顔色に出てしまった。物思いをしているのかと人に聞かれるまでに。拾遺集・恋

一・六二二、拾遺抄・恋上・二二九に前歌と並んで入る。

＊ただしなほ〜――しかしそれでも判定を下しなさい。　＊大納言源朝臣――源高明。　＊屈敬して――平身低頭して。

＊この間〜――その間も左方右方ともに歌を声高に詠じて。

＊小臣頻りに天気を候（うかが）ふに――私が何度も天皇のご様子をうかがっていると。

＊密かに〜――天皇は右の「しのぶれど」の歌をひそかに詠じられたように見えた。

＊天気もしくは右に在るか――天子の御意向は右歌にあるのかもしれない。

＊てへれば――「と言へれば」の転。　＊思ふ所有りて――判者としての私見では。　＊持――引き分け。

＊祇候――伺候。　＊拝舞――叙位・任官・賜禄の時なそに拝謝の意を示す礼の形式。　＊自余――そのほか。

天徳内裏歌合（九六〇年四月三十日　村上天皇主催）

兼盛と忠見の対戦表

	題	兼盛	忠見
1	霞	×	
2	鶯	×	
3	鶯	×	
4	柳	○	
5	桜		
6	桜	―	
7	桜		
8	款冬（やまぶき）	×	
9	藤	○	
10	暮春		
11	首夏		
12	卯花	○	×
13	郭公	―	
14	郭公		―
15	夏草	×	○
16	恋		
17	恋		
18	恋		
19	恋		
20	恋	○	×
勝		4	1
負		5	2
分		2	1

勝ち＝○　負け＝×　引き分け＝―

空欄は歌を選ばれず不参加。

【ウィキペディアより】

天徳内裏歌合（てんとくだいりうたあわせ）は、天徳四年三月三十日（九六〇年四月二十八日）、村上天皇によって行われた歌合。

三月初めに示された題は霞、鶯、柳、桜、款冬（山吹）、藤、暮春、首夏、郭公（ほととぎす）、卯花、夏草、恋の十二。鶯、郭公が各二、桜が三、恋が五の計二十番で戦われた。判者（はんじゃ：勝敗を決める役）は左大臣藤原実頼、その補佐に大納言源高明（たかあきら）、講師（こうじ：歌を読み上げる役）は左方・源延光、右方・源博雅、方人（かたうど：応援する役）には女房たちが左右に分かれ、それぞれ左方は赤（朱）、右方は青（緑）を基調に衣裳を揃えるなど趣向を凝らしたものであったという。

当日は午後早くから会場となる清涼殿の準備が始まったが、左方の州浜の参上が遅れ、歌合が始まったときはすでに日が暮れていたといわれる。歌合は夜を徹して行われ、左方の十勝五敗五引き分けで終わった。歌合のあと管弦の遊びが催され、退出は翌朝のことであった。

問　以上を参考に、次の二つのことを考えてみよう。

1　本文の二重傍線部「拝舞して退出し、*自余の歌の勝負に至りては執せず」とあるが、兼盛が大喜びして、他の歌の勝敗にはこだわらなかった（兼盛は通算四勝五敗二引き分け）のはなぜか。

2　無住の「沙石集」では忠見が死んだことになっているが、「袋草紙」にはその記述がないし、また忠見には晩年の作もあるという。無住はなぜ忠見を死んだことにしたのか。その理由を考えてみよう。